

辻晋堂《詩人（大伴家持試作）》



辻晋堂(1910-81)《詩人(大伴家持試作)》/1942年/木、着彩/196.0×47.0×41.8cm/令和3年度寄贈/撮影：大谷一郎

辻晋堂^{しんどう}の名は、陶土を用いた彫刻(陶彫)によって歴史に刻まれています。同時代の前衛陶芸集団・走泥社を触発し、親交の深かった彫刻家の堀内正和とともに、その抽象的造形は戦後美術の一潮流を形成しました。すでに当館が収蔵する辻の2点も抽象的な作品ですが、こちらは木彫の人物像。第29回院展(1942年)で第1賞を受賞した記念碑的作品で、辻の後援者であった大阪の肥料問屋・黒田甚三郎旧蔵品をこのたびご寄贈いただきました。

三十六歌仙の一人として知られる大伴家持は因幡国(現在の鳥取県東部)の国守を務めており、鳥取出身の辻に馴染みがあったのかもしれませんが。鷹を持たせたのは、家持が特に鷹狩りを好み、鷹を詠んだ歌が知られることを踏まえたものでしょう。万葉集に因む歌人を選んだ背景には時局下の国粹的風潮も関係したに違いありません。前年の1941年、辻は満州開拓移民の像を制作しています。

それにしても、大伴家持という稀なモチーフ、しかも裸体。「思ひも寄らぬ構想」と評した平櫛田中の言葉^[1]が残されていますが、素手に乗せた鷹(危ない)、たまたま腹部に張り付いたような薄布、縦線で表した簞のような陰毛など、各々の要素はいかにも奇異です。ただし全体の印象としては、体軀がゆるやかなS字を描く、いわゆるコントラポストの古典的なポーズが安定しています。

何より特徴的なのは、全体に残る粗^のい鑿跡と所々に露出した埋め木や継ぎ目でしょう。堀内正和はこう述べています。「彼は、よく研いだ鑿で精密に仕上げる正統的院展式木彫に飽き足りず、もっとごつごつした手法で、素朴というより粗野な力のあるものを求め[...]埋め木の継ぎ目がよく見えるようにわざと不細工に仕上げている。[...]作品が木で出来ているその木の感じをそのままむき出しにした方が作品として強い、と考えたからである」^[2]。1940年を前後する時期、辻は原型に依らずに直接木を彫り出す「直

彫」を試みます。「寫す彫刻もあつたついでに、又一方に表はす彫刻といふものがあつていい」^[3]。本作は辻にとって、主観的な表現主義の試作であったのです。

その「表はす彫刻」の着想の裏には、独創的な木彫で期待されながら1935年に早世した橋本平八からの影響もうかがえます(先に引用した平櫛の評にも「橋本平八の亡き後を受け」とあり、堀内も橋本に強い関心を抱いていました)。貴重な戦中期の彫刻であることも含め、今後の研究が俟たれる作品です。

[美術課主任研究員 成相肇]

[註]

- 1 平櫛田中「辻と私」1949年6月18日
尾崎信一郎「辻晋堂の仕事——彫刻の彼岸へ」『生誕100年 彫刻家 辻晋堂展』図録(2010年)より引用。
- 2 堀内正和「モデル・イメージ・無心」『現代彫刻の異才 辻晋堂展』図録、1983年
- 3 辻晋堂「煩と簡」『辻晋堂陶彫作品集』講談社、1978年